

(コラム) 生物の多様性を育む農業国際会議 (ICEBA) がめざすもの

呉地 正行 (ラムサール・ネットワーク日本・水田部会)

水を張り、稲を育てる田んぼは、農地であるとともに様々な生きものがすめる湿地の機能も持ち、何千年にもわたりアジアを代表する農業湿地として、私たちに恵みを与えてきました。一方で、農業の近代化 (工業化) とともにその機能が著しく劣化したため、それに歯止めをかけ、農業、環境の両面から持続可能な田んぼの機能を取り戻すことが大きな課題となってきました。

生物の多様性を育む農業国際会議 (ICEBA) は、これらの背景を踏まえ、田んぼにすむ身近な生きものたちの底力が、末永く恵みを生み続ける田んぼに必要不可欠という認識のもとに、2010年に誕生しました。その名称が長いので、その略称として英語名 (注1) の頭文字を取り、ICEBA (アイセバ) と呼んでいます。

ICEBA は、田んぼの生物多様性を基盤として、その保全と積極活用を通じて、持続可能で環境創造する農業技術を確立し、それを国内・国外で普及・実現するために定期的に開催されている国際会議です。

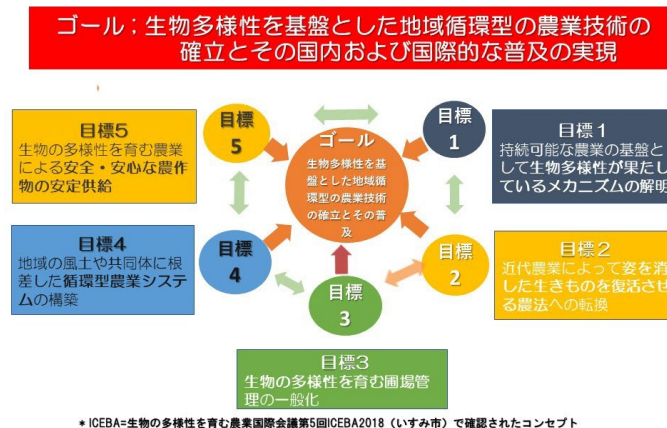
その誕生は、民間稲作研究所の故稲葉光圀所長が主宰する「日中韓・環境創造型稲作技術会議」と NPO 田んぼの岩渕成紀前理事長らを中心とした「日韓・田んぼの生きもの調査」が出会い、お互いの活動を一本化して地域の自然資源を循環活用する農法と、それを評価する田んぼの生きもの調査の統合をめざそうという合意に始まります。

この合意により、表裏一体の関係になっていた、その地域の自然資源を活かした水田農法と、田んぼの生物多様性を向上させる取り組みを統合することができました。そして総合的生物多様性管理 (IBM) (注2) の視点も加え、農法の進捗状況を、生きもの調査を通してモニタリングし、その結果を持続可能な農法の評価に活かす枠組みができました。

第1回のICEBAは、2010年7月に兵庫県豊岡市で開催され、その後、新潟県佐渡市 (2012年7月)、宮城県大崎市 (2014年12月)、栃木県小山市 (2016年8月)、そして千葉県いすみ市 (2018年8月) での第5回までは2年毎に、また第2フェーズをめざす New ICEBA となった第6回は2023年11月に佐渡市で開催され、第7回は、2025年7月に徳島県小松島市で開催予定です。

ICEBA ではそれぞれの開催地に深く関わるテーマを軸に、議論を深めてきました。第5回のICEBA 5では、これまでの4回の議論を総括し、「ICEBA がめざすもの」を議論し、それを1つのゴールと5つの目標にまとめました (図1)。

図1：生物の多様性を育む農業 (ICEBA) がめざすもの



* ICEBA=生物の多様性を育む農業国際会議第5回ICEBA2018 (いすみ市) で確認されたコンセプト

これらの目標は、田んぼの多様な生きものが、持続可能な農業にどのように貢献しているかを明らかにする調査を行い、生きものの底力を可視化すること(目標 1)、農業の近代化で姿を消した生きものを復活させる農法の導入(目標 2)、田面と水路の落差解消の圃場整備計画段階での具体化と、生物多様性に配慮した水管理の一般化(目標 3)、生きものを含めた地域資源の循環活用とそれを支える文化の重要性(目標 4)及び、安全で安心な農産物とその物語の供給(目標 5)で、これらの目標達成を通じて、そのゴールである「生物多様性を基盤とした地域循環型の農業技術の確立とその国内および国際的な普及の実現」をめざすことについての参加者全員の合意が得られました。

ICEBA5 までは、開催地の自治体が予算化も含めその準備を全て担ってきました。そのために、大きな成果が上がった一方で、主催者の負担も大きく、新たにバトンを受け継ぐ自治体を見出すことが困難となりました。そこで、関係者で持続可能な New ICEBA6 を再スタートさせるための議論を重ね、New ICEBA6 が 2023 年 11 月に佐渡市で開催されました。

New ICEBA では、主催者の負担軽減のために、地元自治体を含む複数組織が共催し、国外からの招待者は、可能な限りオンライン参加とし、経費と労力を削減し、また常設の事務局機能を持つ運営委員会を設置し、長期的な調整も行うこととなります。

注 1) International Conference for Enhancing Biodiversity in Agriculture

注 2) 桐田圭治(2004年)「「ただの虫」を無視しない農業：生物多様性管理」、築地書館